

上智大学英文学会

第41回大会プログラム

と き 2016年10月22日 (土)

ところ 上智大学7号館14階特別会議室

I 13:30 総会

開会の辞

会長・上智大学英文学科教授 永富 友海

活動報告・会計報告

事務局

II 研究発表

13:40 「J. D. サリンジャー〈グラス・サーガ〉における

東洋思想とシーモア・グラスの死」

上智大学大学院博士前期課程1年 川上 晃

司会 上智大学非常勤講師 岩川 倫子

14:15 「大覚醒期におけるJonathan Edwardsの身体観」

上智大学大学院博士後期課程3年 皆川 祐太

司会 上智大学非常勤講師 馬上 紗矢香

III 15:00 シェイクスピア没後400年記念特別公演

劇団鳥獣戯画による『三人でシェイクスピア』

場所 上智大学10号館講堂

開場 15:00

開演 15:30

終演予定 17:00

IV 17:10 閉会の辞

大会準備委員長 西 能史

V 17:45 懇親会

上智紀尾井坂ビル5F会議室4

会費：4,000円（大学院生・学部生は2,000円）

〈研究発表〉

J. D. サリンジャー〈グラス・サーガ〉における 東洋思想とシーモア・グラスの死

大学院博士前期課程1年 川上 晃

J.D.サリンジャー(J. D. Salinger, 1919-2010)の作品群は、『ナイン・ストーリーズ』(*Nine Stories*, 1953)のエピグラフに禅の公案が掲げられている点から、禅仏教との関わりにおいて論じられることも多い。中でも、主人公が理由も告げずに突然の自殺を果たす短編「バナナ・フィッシュにうってつけの日」("A Perfect Day for Bananfish," 1948)をはじめとしたグラス家に纏わる作品群は作中にも東洋思想への言及が多く、東洋思想は大きなテーマの1つとなっている。

これまではグラス家長兄のシーモア・グラス(Seymour Glass)の自殺がイエス・キリストの死のように肯定的なものであるのか、それとも苦しみ of 末の否定的なものであるのか、という観点からの批評が中心であったが、本論では自殺の理由を出発点とし、禅・ヨーガを中心とした東洋思想の観点から自殺が家族に及ぼす波及効果まで論を推し進め、グラス・サーガ全体を大きな円環として捉えることを試みる。

「バナナ・フィッシュにうってつけの日」では31歳のシーモアの自殺が描かれるが、その後出版された作品、『大工よ、屋根の梁を高く上げよ』(*Raise High the Roof Beam, Carpenters*, 1955)や『シーモア——序章』(*Seymour—An Introduction*, 1959)では、より若い時代のシーモアの姿が本人の遺した日記や手紙を通して描かれている。そこに禅の求道者としてのシーモアの姿を見出し、シーモアは悟りの不達成が原因で自殺に至ったのだという結論を導きたい。しかしシーモアの死は同時に、肯定的な側面も有している。シーモアの悟りの不達成における1つの大きな原因として、シーモアが師を持たなかったことが挙げられるが、シーモアは死ぬことによっていわば聖霊となり、「師」として兄弟姉妹が苦しみを逃れる手助けをすることを思い立ったのだと考えられる。

そして『フラニー』(*Franny*, 1955)、『ゾーイ』(*Zooey*, 1957)では、長兄シーモアがついに果たせなかった悟りを、次男のバディ(Buddy)が達成し、さらにそれがゾーイ、フラニーに伝えられるさまが描かれる。『ゾーイ』のラストシーンは『ナイン・ストーリーズ』冒頭で示された「隻手音声」を想起させ、シーモアが亡くなった後で、シーモアが思い描いた通りに教えが伝達されたことが示される。

グラス・サーガ全作品を1つの大きな作品と見て、主にサリンジャーも愛読していたとされる鈴木大拙、ヴィーヴェカーナンダの言説、あるいは仏教の聖典を基に、新たな解釈を提示したい。

大覚醒期における Jonathan Edwards の身体観

上智大学大学院博士後期課程3年 皆川祐太

植民地時代のアメリカを対象とする研究者は、主に Perry Miller の見解を修正することで自らの立場を打ち出してきた。そのなかで、最近取り上げられる論点が身体である。例えば、Martha L. Finch のプリマス植民地の社会と宗教生活の研究(2009)や Janet Moore Lindman の初期バージニアとペンシルベニアのパプティストの研究(2011)は共に身体という視点から新たな議論を展開している。

しかし、初期アメリカの代表的な神学者、Jonathan Edwards(1703-58)の思想を身体というテーマで考察することは、ジェンダー論を除き、あまり行われてこなかった。特に、身体という切り口で、初期ニューイングランドにおけるピューリタニズム思想の展開を論じる余地は、まだ多く残されていると思われる。

本発表では、Edwards の大覚醒期における作品の身体描写を分析し、Edwards の身体観を考察する。まず、彼が回心体験を語る際、それに伴う身体反応を具体的な事例に即して紹介していることに着目し、その個々の事例を分析することで、Edwards の描く身体の特徴を議論する。次に、彼の認識論を形作る重要な概念である「新しい霊的感觉」(a new spiritual sense)という回心体験において信徒に与えられる新たな感覚の認識過程が、身体反応の描写と重なる点を指摘し、Edwards が回心体験に付随して起こる身体の反応を、この「新しい霊的感觉」の認識論的枠組みに位置づけている点を論じる。最後に、Thomas Shepard (1605-49)、Anne Bradstreet (1612-72)、Michael Wigglesworth (1631-1705)、そして Cotton Mather (1663-1728)を例に、ピューリタン第一世代から第三世代の人々の日記、自伝、詩作品そして医学書の語りに描かれる身体表現を分析し、Edwards の描写と比較することで、「新しい霊的感觉」を巡る認識論が Edwards に新たな身体の位置づけを可能にした点を論証する。

〈シェイクスピア没後400年記念特別公演〉

『三人でシェイクスピア』

場所：上智大学 10 号館講堂
主催：上智英文学会
後援：千代田区
出演：劇団鳥獣戯画（赤星 昇一郎・
石丸 有里子・ちねんまさふみ）
訳：小田島雄志・長谷川仰子
演出：知念正文
音楽：雨宮賢明
照明：佐久間巨照
宣伝美術：池田英樹（TRAVIS）
企画・製作：劇団鳥獣戯画

本年度の上智英文学会では、シェイクスピア没後 400 年を記念して、劇団鳥獣戯画による『三人でシェイクスピア』の公演を上智大学 10 号館講堂で行います。

たった三人で、シェイクスピアの 37 作品を 90 分で演じる抱腹絶倒の喜劇です。15 時開場、15 時 30 分開演、上演時間は 90 分、17 時には終演の予定です。英文学科の学生諸君、上智英文学会員のみなさまを本公演に無料でご招待いたします。ご家族、ご友人等お誘いあわせのうえ、どうぞお気軽にいらしてください。当日、会場でお目にかかれるのを楽しみにしております。